

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごしよ

四糸金吾殿御書

新版
1513
ゝ
1515

しじょうきんごどのごしよ

四条金吾殿御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

しじょうきんご

文永 8 年 (71)

7 月 12 日

50 歳

四条金吾

ゆき

しろ

そうろうはくまいいっと

ふるぎけ

そうろうあぶらひとつつ

雪のごとく白く候 白米一斗、古酒のごとく候 油一筒、

おんふせいつかんもん

ししや

ぼんりようおく

た

そうろう

御布施一貫文、わざと使者をもつて盆料送り給ひ候。

こと

おんもん

おもむきあ

がた

おぼ

そうろう

殊に御文の趣有り難く、あわれに覚え候。そもそも

うらぼん

もう

みなもと

もくれんそんじや

はは

しょうだいによ

もう

ひと

盂蘭盆と申すは、源、目連尊者の母・青提女と申す人、

けんどん

ごう

ごひやくしょうがきどう

墮

たま

そうろう

もくれん

慳貪の業によりて五百生餓鬼道におち給いて候を、目連

すく

ことお

そうろう

ほとけ

救いしより、事起こりて候。しかりといえども、仏には

成

ゆえ

わ

み

ほけきよう

ぎようじや

ゆえ

なさず。その故は、我が身いまだ法華經の行者ならざる故

はは ほとけ

りようぜんはちかねん ざせき

に、母をも仏になすことなし。靈山八箇年の座席にして、

ほけきよう たも なんみようほうれんげきよう とな たまらばっせんだんこうぶつ

法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋梅檀香仏と

たま とき はは ほとけ たも

なり給い、この時、母も仏になり給う。

せがき おお そうろう ほけきようだいさん い う

また施餓鬼のこと仰せ候。法華經第三に云わく「飢え

くに きた だいおう ぜん あ

たる国より来つて、たちまちに大王の膳に遇うがごとし」

うんぬん もん ちゅうこん しだいしようもん だいご ちんぜん 音

云々。この文は、中根の四大声聞、醍醐の珍膳をおとに

聞 こんきよう きた はじ だいご あじ 飽

もきかざりしが、今經に來つて始めて醍醐の味をあくまで

嘗 むかし飢 こころ 止 と

になめて、昔うえたる心をたちまちにやめしことを説き

たも もん がきくよう とき もん じゆ

給う文なり。もししからば、餓鬼供養の時は、この文を誦し

なんみようほうれんげきよう

とな

巾

たも

そうろう

て、南無妙法蓮華經と唱えてとぶらい給うべく候。

そう

がき

さんじゅうろくしゅるいあい分

そうろう

総じて、餓鬼において三十六種類相わかれて候。その

なか

かくしんがき

もう

めくち

がき

そうろう

中に鑊身餓鬼と申すは、目と口となき餓鬼にて候。これ

しゅいん

もう

よ

よう

ごうとう

はいかなる修因ぞと申すに、この世にて夜討ち・強盜など

そうろう

そうろう

じきとがき

もう

ひとくち

をなして候によりて候。食吐餓鬼と申すは、人の口よ

吐い

ものしよく

そうろう

しゅいん

かみ

りはき出だす物を食し候。これも修因、上のごとし。ま

ひと

じき

奪

そうろう

じきすいがき

ふぼこうよう

た人の食をうばうにより候。食水餓鬼というは、父母孝養

てむ

みず

のがき

うざいがき

もう

のために手向くる水などを吞む餓鬼なり。有財餓鬼と申す

うま

蹄

みず

餓鬼

こんじよう

たから

は、馬のひづめの水をのむがきなり。これは今生にて財を

惜 じき 隠 ゆえ むざい もう う

おしみ食をかくす故なり。無財がきと申すは、生まれてよ

このかた おんじき な 聞 餓鬼

り以来、飲食の名をもきかざるがきなり。

じきほう もう しゅつけ ぶつぼう ひろ ひと われ ほう

食法がきと申すは、出家となりて仏法を弘むる人、我は法

と ひとそんなけい おも みようもんみようり こころ

を説けば人尊敬するなんど思いて、名聞名利の心をもつ

ひと 勝 おも こんじよう しゅじよう

て人にすぐれんと思つて今生をわたり、衆生をたすけず、

ふぼ 救 こころ ひと じきほう ほう 食

父母をすくうべき心もなき人を、食法がきとて法をくらう

餓鬼 もう

がきと申すなり。

とうせい そう み ひと 隠 われいちにん くよう 受

当世の僧を見るに、人にかくして我一人ばかり供養をう

ひと くけん そう ねはんぎよう み

くる人もあり。これは「狗犬の僧」と涅槃経に見えたり。

これは未来には牛頭みらいという鬼おにとなるべし。また人ひとにしらせ

くよう

よくしん

じゅう

ひと

ほどこ

ひと

て供養をうくるとも、欲心めずに住して人に施おにすことなき人

みらい

めず

おに

そうろう

ざいけ

もあり。これは未来には馬頭めづという鬼おにとなり候。また在家

ひとびと

わ

ふぼ

じごく

がき

ちくしやう

墮

くげん

受

の人々も、我が父母、地獄・餓鬼・畜生おんじきにおちて苦患くげんをう

甲

われ

えぶく

おんじき

飽

満

くるをばとぶらわらずして、我は衣服・飲食おんじきにあきみち、

ぎゆうば

けんぞくじゆうまん

わ

こころ

まか

ひと

牛馬・眷属ふぼ充滿養して、我が心うらに任せてたのしむ人をば、

ふぼ

養

うら

たも

そう

なか

いかに父母ふぼのうらやましく恨み給うらん。僧そうの中にも

ふぼ

ししやう

めいにち

甲

ひと

希

さだ

てん

父母・師匠ふぼの命日ししやうをとぶらう人はまれなり。定めて、天てんの

にちがつ

ち

ちじん

怒

憤

たま

ふこう

もの

思

日月、地の地神ち、いかりいきどおり給いて、不孝ふこうの者とおも

わたもせ給うらん。形は人にして畜生のごとし。人頭鹿とも申かたち ひと ちくしよう にんずろく もう
すべきなり。

にちれん ごうしよう 消 果 みらい りようぜんじようど 詣

日蓮、この業障をけしはてて未来は靈山浄土にまいるべ

思 しゅじゆ だいなんあめ 降 くも

しとおもえば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき

そちら ほけきよう おんゆえ

候えども、法華經の御故なれば、苦をも苦ともおもわず。

にちれん で しだんな たも ひとびと こと こんげつじゅうににち

かかる日蓮が弟子檀那となり給う人々、殊に今月十二日の

みようほうしいうりよう ほけきよう ぎようじや にちれん だんな

妙法聖靈は法華經の行者なり、日蓮が檀那なり、いか

が きどう 墮 たも さだ しやか たほうぶつ じつぼう

でか餓鬼道におち給うべきや、定めて釈迦・多宝仏・十方の

しよぶつ ごほうぜん しじようきんごどの はは はは

諸仏の御宝前にましますさん。「これこそ四条金吾殿の母よ母

どうしん

摩

よろこ

褒

たも

よ」と、同心に頭をなで、悦びほめ給うらめ。「あわれ、

こ われ

しゃかぶつ

語

たも

いみじき子を我はもちたり」と釈迦仏とかたらせ給うらん。

ほけきよう

い

ぜんなんし

ぜんによにんあ

みようほけきよう

法華經に云わく「もし善男子・善女人有つて、妙法華經の

だいばだつたほん き

じようしん しんぎよう

ぎわく しよう

提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜずん

じごく

がき

ちくしよう

お

じつぽう

ぶつぜん

しよう

ば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜ

しよう

ところ

つね

きよう

き

ん。生ずるところの処にて、常にこの經を聞かん。もし

にんてん

なか

しよう

しようみよう

らく

う

ぶつぜん

あ

人天の中に生ぜば、勝妙の樂を受け、もし仏前に在らば、

れんげ

けしよう

うんぬん

きようもん

ぜんによにん

み

蓮華に化生せん」と云々。この經文に「善女人」と見えた

みようほうしようりよう

た

り。妙法聖靈のことにあらずんば誰がことにやあらん。

また云わく「この経きようは持ち難たもし。もししばらくも持たば、

われ すなわ かんぎ しょぶつ

我は即ち歡喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごときの人は、

しょぶつ ほ

うんぬん にちれんさんだん

諸仏の歎めたもうところなり」云々。日蓮讚歎したてまつる

物 数

しょぶつ ほ

ことはもののかずならず。「諸仏の歎めたもうところなり」

み

頼

しんじん

深

と見えたり。あらたのもしや、あらたのもしやと、信心をふか

取 たも

しんじん

たも

くとり給うべし、信心をふかくとり給うべし。

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

きようきようきんげん

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

しちがつじゅうににち

にちれん かおう

七月十二日

日蓮 花押

しじようきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事